

出張報告

研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開による
鹿児島調査(2013年3月)

旧制度以来、日本文化研究所では日本各地における国学関連の資料・文献の調査・収集につとめてきており、本研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」においても、事業の一環として国学関係の資料収集を継続的に実施してきた。そうした中、平成25年度は、平成26年3月12～14日にかけて鹿児島県歴史資料センター黎明館及び鹿児島県立図書館において国学関連の資料・文献調査を行った。これは、薩摩藩および鹿児島県が近代日本形成において重要な役割を果たした地であるとともに、近世・近代の神道・国学を考える上でも重要な地域であるという理由による。例えば、近世薩摩藩では浄土真宗が禁止されていたことをはじめ、神代三山陵の存在すること、平田国学の受容、薩摩藩と桂園派歌人の交流、幕末における藩内での廃仏毀釈等があり、明治維新以降には、明治初年に設置された国学局や、浦上キリシタン配流、薩摩出身の神道人・国学者が中央政界へ進出することによる教部省の国民教化政策への関与、神宮の東京遷座案推進等といった多くのトピックスがあげられる。また、近代神道史の画期となった神官教導職分離による神官の葬儀関与の禁止法令に「但府県社以下ハ従前之通」との文言が盛り込まれたのも鹿児島県の実情を反映してのものであった。このように近世・近代の鹿児島は、神道・国学研究という視点からも検討に値する様々な課題を有しているのである。しかし、これまで日本文化研究所の神道・国学研究部門では、昭和60年に近藤芳樹・小河一敏関係調査において鹿児島県立図書館所蔵の

『八田知紀一代略記』『白鷺洲』『鹿児島藩紀伝体和歌史』を収集するに止まっており、その後、十分な資料調査は行われてこなかった。

こうした状況を踏まえ、本年度の調査では、遠藤潤（神道文化学部准教授）と武田幸也（研究開発推進機構PD研究員）の2名が、3月12日から14日にかけて国学関係の資料・文献の調査を行った。まず、3月12日には、武田が鹿児島県立図書館において、国学者の伝記研究や著作、明治以降に薩摩藩で設立された国学局関係の資料の有無、鹿児島県内の郷土資料の所在等について、主として鹿児島県の郷土研究の確認や、郷土資料に関する目録等を手がかりとして調査を行った。国学者の著作については、『近世薩州群書一覽』や『薩摩刊書関係資料』を通して、白尾国柱、山田清安、大河内隆棟、八田知紀、岩下方平、高崎正風、黒田清綱、田中頼庸、後醍院真柱等の著作の存在を確認した。国学局については、その動向を窺わせるような具体的資料については確認できなかったが、国学局の出版した『敬神説略』を閲覧した上で資料として複写を行った。また、郷土資料に関する目録からは、他の公共図書館にも国学者の書簡や資料の存在について確認することができた。ついで3月13日には、昼から遠藤が合流し、前日から継続して鹿児島県の郷土研究や郷土資料の存在を確認するとともに、翌日の鹿児島県歴史資料センター黎明館における葛城彦一文書調査に向けての予備調査も併せて行った。葛城彦一は、大隅国始良郡加治木に生まれ、はじめ竹内伴右衛門と称した人物で、天保5年、江戸に遊学して

平田篤胤の『靈能真柱』に触れ、天保9年気吹舎に入門している。次いで、嘉永3年の自由羅騒動（別名 高崎崩れ、嘉永朋党事件）に関与して脱藩し、筑前に身を寄せ、文久3年に帰藩して葛城彦一と称し、近衛家に仕えた。また、葛城と鈴木重胤との交流も注目され、重胤の『世継草』の後序を記すなどしている。このように葛城彦一は、篤胤から直接教えを受けた人物で、幕末には近衛家の執事となるなど、薩摩藩における平田国学の受容を考える上で一つの軸となる人物であるとともに、幕末における平田派国学者のネットワークや活動を窺い知る上でも重要な人物であることが再確認できた。

以上を踏まえ、3月14日は、鹿児島県歴史資料センター黎明館において、葛城彦一文書の内、平田鋳胤の書簡と葛城彦一関係の日記について調査を行うと共に、資料として収集するための撮影を行った。書簡は、平田鋳胤からの葛城らに宛てた書簡を9点、日記は断片的であるが幕末から明治10年代はじめにかけての8点である。

書簡の調査からは、葛城と平田鋳胤や学塾である気吹舎との交流の一端が明らかになった。また、日記は長い時期を網羅したものではないが、文久3年、元治元年、明治11年など、それぞれ幕末から明治にかけての神道・国学にとって特徴的な時期のものが残っており、これらの記録は平田国学者をはじめとする葛城の多彩な交友関係を窺い知ることのできる貴重な資料であることが判明した。

明治10年代からの平田国学をめぐる論点として興味深いものの一つに本教教会があるが、今回の調査では、年欠ではあるが、いずれも明治11年のものと推測されるいくつかの書簡、すなわち8月18日付葛城君宛鋳胤書簡（葛城彦一文書 3-2396）、10月9日付葛城彦一宛鋳胤書簡（葛城彦一文書 3-2397）の調査・撮影を行った。これらは山内修一『薩摩維新秘史 葛城彦一伝』（葛城彦一伝編

輯所、1935年）にすでに翻刻が収められているものであるが、原史料を改めて確認し、その内容を検討した。日記では、「葛城彦一翁日記の断片 明治十二年日記」（葛城彦一文書 3-2498）の3月5日前後の部分に本教教会関係の記事があり、平田家から彦一宛に書籍『本教学解』、『本教略解』や「本教学神号」、「本教教会祭神号」が送られていることが確認された。

これとは別であるが、近世後期から幕末期にかけての葛城は、嘉永2年（1849）冬に気吹舎が『三五本国考』を刊行するに際して序をものしており（山内前掲『葛城彦一伝』）、嘉永3年初頭には平田家に逗留して世話になるなどしている（『歴史民俗博物館研究報告』122）。鈴木重胤との親交も知られ、太宰府天満宮での和魂漢才碑の建立にも関与している（春山育次郎『月照物語』夏汀堂、1927年、山内前掲『葛城彦一伝』など）。今回の調査では、先行研究を手がかりとして、これらの経緯についての整理を進めたが、こうした九州での彦一のさまざまな活動も、近年の平田国学研究で明らかにされている諸史料ならびにそれにもとづく諸事実との照合を基礎とした再検討が必要かと考えられる。

総論的にいえば、今回の調査では、鹿児島県内における国学研究の状況や資料の所在等を確認するに止まり、薩摩国学に関する十分な調査には至らなかったが、近世・近代の薩摩国学の重要性については再確認できた。とりわけ葛城彦一関連の資料調査によって、葛城が個人として気吹舎と関係を有していただけではなく、九州地域における平田国学関係者間のキーパーソンであったことが確認された。そのため今後は、学内および諸機関所蔵の薩摩の国学者に関わる文献・資料等について再確認・整理した上で、鹿児島県における神道・国学関係資料の調査・検討を継続したいと考える。

（遠藤潤・武田幸也）